

君は所謂薩摩男子の氣質の所有者だけあつて君の全身にはいつも赤い血潮が漲つてゐた。けれど今から思へば何處となく淋しさうな、弱々しい氣分は、そこらの子供から『兄ちゃん兄ちゃん』となつかれた君のやさしさが闡明してゐた。

けれどあの消費組合の一隅に、天華の夕べに、あの三乙の親しき友の集ひに、或は切齒扼腕して時局を論じ、或は人事に宗教に哲理に大にお互に青春の意氣を見せたものだつたね。そんな時にも君は常に多くを語らず沈黙を守つては居たが、あのぼつくと語り出す數少き言葉の中には、何處となくピンと人の心の或るものにふれる眞理めいた事を言つては、僕等を感じさせたものだつたね。そして君の意見に不思議とよく共鳴した僕は、感激のあまりひしとばかり手を握り合つて將來を想望したのも君と僕だつたね。

あゝされど今や其の友はいまきず。

呼べど答へず君はや歸らず、悲しども悲し。

黙禱や、しばしありし日の君が面影の眼前に彷彿として思ひ出づるも只涙あるのみ。

涙、涙、涙、

さあれ愛するもの逝きて現世と靈界との聯鎖が生ずるとか、天より出でたるもの天に歸る。

水引君！

僕等はまだ泣くまい、なげくまい！

そして君が永劫の夢安かれど、淋しく瞬く星影を仰ぎつゝ、只々禱るばかりである。

あゝ水引君！

一人で行く旅は淋しからう。

しかし眠つたものはいつも側に居るのだ！

言葉は交すよしなくとも常に常に僕等の側に居てくれる君である事を僕は嬉しく思ふ。

そして、そして、いつまでもく／＼手に手をとつて行つてくれ！！

水引君！

僕は、僕は思ひが亂れて、もう此上筆を運ぶ事は出来なくなつた。

許してくれ！ 書きたい事はいくらでもある、山程ある！ しかし

し、しかし、もう一字も書けないんだ。あゝ胸が塞りさうだ！

許してくれ！

さらば水引君！！

さらば澄男君！！

(はるげき旅路にて涙に烟びつゝ、昭和四年九月初旬)

一言集

一體おまへ達は、自然を、どうしようと言ふんだ！？

『我等の偉大なる科學力は、遂に自然を完全に征服せり！』

成程ね。雷に車を引かせ、飛行機や潜水艦の發明は、人間生活を立體的にした。

それが、自然をどうしたと言ふのだ！？

眞理の大海は渺茫として際涯なく、只おまへ達は、科學といふ提燈で、二三尺四方を照して、そこに落ちてゐる蛤を一つ二つ拾つたといふまでだ。

"I seem to myself like a child," observed he, "playing on the sea-shore, and picking up here and there a curious shell and a pretty pebble while the

boundless ocean of truth lies undiscovered before me.”

ゲーテも『如何に自然に反抗せんとするも、その法則を守る他なし』
と言つてゐるではないか。

Every man has his weak side.

此弱さがあればこそ、美しい同情心も起る、同情心は、やがて愛
への光明である。博い愛、深い愛、高い愛を以て萬物を愛いとしくんでやり
たい。

人間が生活して行く上に必要缺ぐ可からざるものは、價が安く(或

は、自由財の如く全然金銭的評價の對象となり得ざる無代價物もある。)必要の程度の小なるもの程高價なのは、かの日光や空氣や水の如く吾人の生活上に絶對的重要性を有するものは、無代價であつて、米、石炭などの生活必需品は、比較的廉價で、牛肉、ダイヤモンドと云つたものは、高價であるのを見れば直ちに肯定出来る。

何故斯くの如き現象を呈するのか僕には解らない。しかし、そこには確かに或る真理の介在する事は容認し得る。そして、それはやがて自然の真理への驚異であり、神秘であり、不可思議である。

『汝自らを知れ』とか『自知者明』とか言ふ言葉は、現代の日本人への最親切なアドバイスではなからうか。

自己を見、自己の内に求める事を忘却して、徒らに外を見、外に求むるは策の得たるものとは思はれない。

社會の改善もさりながら先づ自己の淨化と改善に第一次的肝要性を認めて欲しい。

近頃の新聞や雑誌の大部分は、世の醜惡な、何ら發表の要のない事柄を誇大的に書きつらね、所謂世の麗しい方面の記事は、兎もすると見落しそうな小さな文字で、それも極く稀れに見られる位のものである。

これが眞の世相の表現だとしても『人の性は善なり』とか、どうです、須らく世の新聞雑誌たるもの、その記事の根本的改良に依て、

社會淨化の實を示してもらいたいものですね。

人間生活は、そんなにシンプルなものでない事を先づ考へてから、やれマルクスのやれ唯物史觀のやれ社會主義のと言つてくれ。

さうしないと僕には、てんで頭から解らないんだ。人間生活に物質的方面と精神的方面のある事實をもう一度考へて見て下さい。

そして、その両面の分界線が、極めて不分明で、お互に切り離して考へる事が出来ない位くひ違つてゐる人間の生活現象だから、それを一元的唯物的に闡明しようとするのはどうも僕には解りかねる。第一人間といふものは、機械の様な單純なものでない事を知つてくれ。

そこが人間の人間たる所以だからね。

一九八

Learn to ask questions (力めて質問せよ)

學んで最大の價值ある事の一つが此處にある。それは、他人の智識と經驗とを利用して我が幾年の勞を省き得る事である。知るに十年の歲月を要する事も、語るには僅か一分で足りやう。他人の確説を引出すやうな質問を出せば、假りに其人と同じ途を歩んだら多分達するだらうと思はれる同一の思想を得ることが能きる。謂はゞ、其の人の智識の終點から始める事が能きる。(You can, as it were, begin where he left off.)

最も得る所ある質問は、慎重に發せられた特種の質問で、時には

根底に觸れたものである。

聰明な質問をするのは一の技術であり、一の貴重な才藝である事を忘れるな。(Always remember that asking intelligent questions is an art-a

valuable accomplishment.)

(Thoughts on business 148)

Before one can be a sound business man, one must first be a sound man.

それは、畫家が畫中に人物を描く時に、體格の釣合の缺點を衣服で隠さうとせず、衣服を描かうとする前に先づ體格の輪廓の正否を確めねばならぬと同様、事業の外觀的成功の厚化粧で、缺點的人格の證跡を塗り隠さうとする輩が實業界に多い事は残念な現象である。此等の徒輩は、地位と勢力とさへ得れば、立派な成功から來る名

一九九

譽も満足も得られると思つてゐる。ところが、未熟な畫家の如く、彼等は誰よりも己れを最も歎くのである。

何物も缺點を有する人格を填め合はすことは能きず、又何物も之を隠す事は能きない。

二三皮相の人々は、唯の外観に不相當の信用を置くかも知れぬ、が、事業の眞價を評定する批判家は欺かれない、即ち皮相の賞讃から受ける如き淺薄な満足をば彼等の批評が打ち消してしまふ。

Nothing but sound manhood can win the true reward of sound manhood.

先づ實業家たらんと欲すれば、先づ人たる事が先決問題たる事を失はないと斷言する。

(Thoughts on business による)

One thing at a time

一時に一事を考へる。而も其れを周到に、熱心に理解的に考へる。それから次の事に轉じて、同じく自由に周到に其れを考へる。

一事を念頭からすつぱり片付け終つて、それから次の事を取り上げねばならぬ。多數の仕事为首尾よく扱ふ人々は、一時に一事を考へる呼吸を心得てゐるからである。

集中を缺ぐ人の心は、大抵一つの事に一瞬間でも全心を籠めたら、他の事が滑つて逃げる恐れが有ると氣味悪がる、そこで何も彼も皆同時に心に留めて置かうとする馬鹿げた恐れを懷いて居るに外ならない。

斷然一時に一事を専心に考へる事が、やがて

Big things are only little things put together だから大きな仕事を成し遂

げる所以である。

(Thoughts on business より)

二〇二

實業家は、政治家や学校の教師、僧侶の社會に及ぼす影響に比し遙に大なるものがある。

何となれば、それは間斷なく社會に接觸し社會即生活であるから、善惡ともに影響を及ぼす事が至大である。

(フォード産業哲學)

一晚に咲かせて見むと梅の鉢を

火にあぶりしが咲かざりしかな。

(啄木)

此焦燥てふ事が、何事をなすにも常に失敗の基であるといふ事位誰でも知り抜いてゐる。

しかし僕など、どうもまだあせる、氣味があるからいけない。

何も火に鉢をあぶらなくとも、花の開く時が來れば自然に綻ぶものだ。

それが大自然の力だ。時の流れの解決だ。

人事にも之と同一筆法の事が多い。まあ、齷齪せずに、出来るだけ自分の心に安靜を得る様にしよう。

自分が可愛くない人があらうか。

自分が可愛なら『人も我が影』と感ずる時、どうして憎んでよか

二〇三

らうか、どうして誹つてよからうか、どうして笑つてよからうか、人生の數多き幸福の中で、最意義あり價值あるものは、他人の幸福を増す事である。

『何とでも云へ大石内藏之助』

處世上堅忍の徳程大切な事はあるまい。

踏みつけられても齒をかみしめて堪わておれ。

そして今に見ておれといふ氣慨の潜在は、やがて、表面に送り出る力の潜壓力である。

自己に恥ぢず、天地に恥ぢざる自己の善と信じたるものへ、どんく延んで行ける人になりたい。

大自然に横はる超人間的力の即ち絶對力の存在は無條件に容認する。と同時に、自己も宇宙の一分子だと感ずる時、人間一匹の力にもどこか此絶對力に似通つた點が見出されぬでもない。故に僕等みたいに未だ自己の未練を離れ得ない人間は、絶對力の大偉力たるは何等疑はざる處であるが、その縮圖的意義を有する自己の力に先づ驚異して見たい。そして、自己の淨化はやがて天道へ通する近道ではなからうか。

現時の學校教育の一大缺陷は、人を對象としての教育即ち人を作

る、事を目標として居ない事である。

それが智育偏重的教育である事は、識者の等しく容認する處で、所謂學校とは、智識の單なる注入機關たるに過ぎず何等人間としての品性の陶冶に着眼せず、全人格の向上といふ様な事はまるで問題にしてゐない事は、否定し得ない事實である。

そして又一方學校で勉強する學生も、

The world can do without many great men, but it needs more than ever a multitude of kindly, loving spirits, and willing hands.

なる事を常に念頭に置いて、一升舛には一升一合は入らぬ事を知つたならば、何も學校教育により皆が皆大將大臣たらんと欲するより、先づ人間として一段高く價值付けられた事を感謝し、己の分に應じた處に生活の糧を求むれば就職の恐懼も左程ない筈である。

そして、*People of culture can be recognized at once. They have a certain dignity about them.* の人格こそ學校教育により望ましがものである。

何が *Every conquest of science brings the human race nearer the day when it will have complete control over the forces of Nature. た！*

否々科學が進歩すればする程 *All the greatest things in nature and links of cause and effect which connect them, are utterly beyond our reach. むじふ事を痛感するであらう。*

そして、人智の如きは大自然の渺茫たる無窮の大海原へ瓢々として棹さし出でし小舟の波浪の間に隠見すると何等異なる處がない

さあれ、君よ、如何に大浪に翻弄さるも如何にそが小さくとも究

理の舟を操りて眞理島の彼岸へと營々として突進し行くこそ吾人の使命であらねばならぬ。

戀愛だ／＼だとやたらに若い人たちは騒ぐ。

愛と云へば戀愛だけの事の様に思はれてゐる世の中だ。人間も動物だ。動物なるが故に時たま其行にも本能的のものが見られないでもない。やむを得ない事だ。お互にお若いんだから。しかしやはり人間は人間だからな。

これでお互に他の動物と同一水平線上に置かれる事は望まない、せいで、こう云つた方面だけは何とか高尚な理窟をくつ／＼けては、其内面に至つては犬猫の行爲と何等異らない様な事をやつてゐる人間

がないでもない様だ。

もつと人間らしい、人間の體面を損はぬ様な廣い深い清い愛であつて欲しいものだ。

最後にも一度愛は戀愛だけでない事を言つておく。

新陳代謝は蒸汽機關の運動にも必要であるが、單細胞生物の生存にも、異細胞生物の夫れにも必要であつて又社會國家の存在にも必要である。

今日の如く、又今後益々激烈となるべき人種競争の時に當つては、國家は一種の生物と考へ、總べての事柄を皆此國家觀念の下に置かねばならぬ事は誰にも見易い事であるから、國家の存在に有害なる

事柄は如何なる事でも犠牲に供せざるべからず。人間の壽命も亦此一つで、此點から言へば我々が死ぬべき時に死ぬるのは或は當人又は近親の者にとつては誠に氣の毒な事ではあるが、國家から考ふれば或は賀すべき事ではなからうか。と石川先生は死といふ事に就て其著『人間不滅』に述べられてゐる。死といふ重大問題を生物學を通じて達觀せられた先生の偉大さを稱揚すると同時に、必然的人生の最大不幸事なる死に直面して如何なる方面からでもよい悠然として迫らぬ覺悟だけはほしいものだ。

愛なき所に、平和は望み得ない。世界の永久的平和を求むるならば、先づ、人類相愛の精神を涵養せよ。而して、試みに、目を現今

の社會相上に轉じて見よ。そこには、果して人類相愛の美が、從つて平和な空氣が、漲つて居るであらうか。人を愛すれば則ち人之を愛し、人を惡めば、則ち人之を惡む道理で、清い心持ちで人を愛し、深い、廣い、高い親愛を以て、人類社會の人々が、互に愛し合ふ時始めて、社會は、圓滿性を充實し、人類平和の成立も可能となる。彼の釋迦も、孔子も、基督も、皆この人類相愛の必要を説いたではないか、そして、『人と我れ一つと思ふ心より、ひらけたるかな愛の天地』てふ人情美の發露こそ、現在社會の闇黒面を打破して、光明へと導く唯一の要諦たるを失はない。(人類相愛)

一國を興すのも、一宗を起すのも、一人の力に依るといふのは、

確かに眞理を包含してゐる。無名の一青年の言論が、よく國論を動か
し、その正義と愛と熱は、よく一國の危きを救ふ。彼の奴隷解放の
第一聲を擧げたるガリソンを見よ。自國を塗炭の苦境より泰山の安
きに置いたムツソリニーを見よ。

又如何なる偉大なる宗教も、其の始めは、一人の力によつて起る
事は、釋迦と云ひ、基督と云ひ、一宗の開祖たるものは、皆一様に、
人類の精神方面を、如何に力強くリードしたかを見る時、肯定し得
る。

その反面に、一國を亡ぼすも、人心を極度に悪化し、動搖させる
のも亦一人の力に關するものなる事を知る時、弱きが如く一見思惟
される個人力の偉大性と其悪用の如何に恐るべく惡むべきかを痛感
する。

茲に於てか、國家社會の構成的分子なる個人は、彼自らを知り、
自己の淨化、自己の改良を、外を見、外に求めつゝ、行ふその事自身
が、その集團たる國家社會を健全強固たらしめ、個人の人格の向上、
精神文化の進展は、一國のみならず、人類社會の淨化への歸結を生
ずるものなる事を深く留意して、自己輕視、自己卑下を戒めて合理
的自尊心を涵養し先づ、各自の完成を先決問題とすべきである。

(二人の力)

泰西寸鐵語集

If you would have a faithful servant and one that you like, serve yourself.

(Franklin)

自分の氣に入る忠實な召使が欲しいならば、自分で自分の召使になれ。
(フランクリン)

For age and want, save while you may, no morning sun lasts a whole day.

(Franklin)

出来る中の老後の用心。夕方まで朝日は照らず。
(フランクリン)

Men are respectable only as they respect.

人を尊敬すればこそ自分も尊敬される。

I will go through fire and water to serve.

あなたの爲めなら、火でも水でも。

Self-trust is the first secret of success.

自己信頼は、成功の第一秘訣。

A man's life is to be measured by what he does in it.

人の一生はその事業によつて計るべきである。

To do as you would be done by is the surest method of pleasing.

己の欲する所を人に施すのは他人を喜ばす最も確かな方法である。

Association with the good can only produce good, with the wicked, evil. 良友と交はれば良人となり、悪友と交はれば悪人となる。

An empty bag cannot stand upright. 空の袋は真直には立たぬ。

The greatest man is he who resists the sorest temptations from within and without. 最も偉大なる人とは内部と外部からの最も烈しい誘惑に抵抗する人である。

The society is not very particular what a man does, so that it prove him to be a man. 何をしてもそれが一人前たる事が解れば社會は八釜敷は言はない。

He that wishes to make a name for himself in the world of to-day must not relax his exertions for an instant. 今日の世界に名を揚げんと欲するものは片時も己が努力を弛めてはならぬ。

Health administers to peace of mind. 健康は心を平和にする。

You must learn to live by the sweat of your brow. 額に汗して暮す事を學ばねばならぬ。

Nature yields nothing, except to the sweat of man's brow. 人間は額に汗をしなければ自然は一物たりとも興へない。

The foundation of success in business lies in the possession of good moral character.

實業界に於ける成功の基礎は善良なる徳性を有する事である。

There is something in human nature which braces up against adversity

人の性には逆境に處し人を鼓舞する或ものがある。

Life is hard. Make up your mind to go steadily forward, and bear your burden.

人性はつらい、着々と前進して重荷を負ふことを決心せよ。

The reason why so many people fail to realize their ideal is that they are not willing to do their best to make it real.

多くの人が自己の理想を實現し能はざる理由は、彼等が全力を盡してそれを實現せしめることを欲しないからである。

Though absolute perfection is denied to human nature those who take the most pains to arrive at it will come the nearest to it.

人生に絶體的の完全といふものはないが、然しそれに到達せんと最も苦心せる人はそれに最も近づくものである。

Do not imagine that to be successful means to get riches and power; for if you get them at the cost of your conscience, it is rather a great failure.

成功とは富や權勢を得ることだと思ふてはならぬ、何故ならば若し良心を犠牲にしてこれ等のを得るならば、それは寧ろ非常な失敗であるから。

Resolve to perform what you ought, and perform without fail what you resolve.

成すべきことはこれを成さんと決定せよ。而して決心せることは必ず之を成せ。

In every one of us there exists an animal which might have been vigorous as wolves and foxes, if it had been left to develop itself in freedom.

凡て吾々の体内には一匹の動物が生存してゐて、若しこれを自由に發達させておいたならば、狼や狐のやうに元氣なものであるであらう。

Pleasure and pain, though directly opposite, are get so contrived by nature as to be

快樂と苦痛とは直接には反對してゐるけれども、然かも絶わす

constant companions.

友達であるやうに自然に工風されてゐる。

The world can do without many great men, but it needs more than ever a multitude of kindly, loving spirits, and willing hands.

世界には多くの偉人がなくとも立つて行けるが、親切な心の人愛情に富める人、喜んで働く人が今時に於て最も多く必要である。

Every man should lay out a clean, straight, level track to his goal.

人は皆己の目的地に到る迄、綺麗な、直線的な水平道を計設しなければならぬ。

The person, old or young, who tries to be other than him-self, makes a failure of life, yet many do this very thing.

老若を問はず己を欺かんと努むる人は、生涯を失敗に歸せしむるものである、然かも多くの人は實はこの事をなすのである。

Most of us manage somehow to find time for the things we love.

大抵の人は己の好む物に對しては、どうにかして時間を見出すものである。

Men pass away, and monuments crumble into dust. What remains and survives is

人は死し、紀念碑は崩れて埃となる、唯残るものは人間の思想

human thought.

である。

Man would have continued a savage, but for the results of the labours of those who preceded him.

人間は前の時代の人々の勞力の結果が残らなかつたならば、野蠻の状態を續けたであらうが。

Without coal iron could not be satisfactorily melted, and, without iron and tools that can be formed from it, coal could not be won so easily as it is.

石炭がなければ鐵は満足に溶解されなない、而して鐵とそれで作られた道具がなければ、石炭は現在に於ける程容易に得ることとは出來ないだらう。

There is no more dangerous experiment than that of undertaking to be one thing before a man's face and another behind his back.

人の前と後とで陰日向のあるやうなことをする位危険な實驗はない。

I can not too much impress upon your mind that labour is the condition which God has imposed on us in every condition of life; there is nothing worth having that can be had without it.

勞働は神があらゆる境遇にある吾々に課した條件であつて、苟も持つ價值のあるものは如何なるものでも乏なしに得ることが出来ないといふ事を諸君の心に深く印象せしめたい。

The selfish in the end can never get anything but selfishness.

利己的な人は終には我儘より外に何も得ることは出来ない。

Prosperity and success of themselves do not confer happiness; indeed, it not uniregently happens that the least successful in life have the greatest share of true joy in it.

繁榮と成功とは獨りでは幸福を興へるものではない、實際人生に於て最も成功せざる人が眞の喜びを最も多く受けることは屢々あることである。

Let every man die with the consciousness
that he has done his best.

誰でも人は自己の最善を盡せり
その自覺を以て死すべし。

二二六

隨筆その他

瓢箪のこごごも

瓢箪と一言に云へば吾人のファースト・イムプレッションがすでに面白くない。何だか所謂瓢箪餘式で押へ處のない年から年中ブラリ／＼と蔭の方で青くなつて、蔓でしつかりと吊されて居りながら、それでゐて平氣と言へば其れまでだが、一見神經的に如何にも氣のぬけた様子で、其の蔓から別に離れて自分の自由の天地へと跳り出す氣力がありさうには更に見えない。しかも瓢箪と言へばすぐ千鳥足を聯想するからこまる、赤い房で胴のあたりをしめた處は一寸氣どつて居るが、花見客のお供では實になさげない。かう考へて見ると先づよく行つてお酒入れ位が關の山とは實に以て何ともお氣の毒

二二七

な氣さへする。そこでどこから見ても弱々しいノラクラした意氣地なしといふ決着になる。けれども實はどうして／＼なか／＼さうではない。斯うやつて不平も言はずに隅つこでブラリと下つて、人様の後からへい／＼とばかりお供はして居るものゝ、其實はそれは只表面だけの事であつて、いざといふ場合はこれで智仁勇兼備の聖となるとは知る人ぞ知るである。何となれば、其れは第一野菜でありながら、一般野菜仲間の強敵なる彼の庖丁の難にかゝらない。これは全く瓢箪聖者の偉大なる智の然らしむる處でなくて何であらう。又次に鯨をおさへてもこれを逃れしむる事實は古へより人口に膾炙されて居る處で、所謂聖の仁たるや禽獸ははおろか鯨にまで及ぶとは。

さうかと思ふと一度生死を決する戰場に聖のたちて、馬じるしと

なるや、雪霞の如き大敵をばおそれしむる、これ勇と言はざるを得ない。

斯くの如く平常何等事なき時はノラリクラリとして御座るがさて非常の場合聖者と凡夫は分界線がたつ。

元來ものは言ひ様である。ヘウタンと言へば、青瓢箪を直感的に腦裡に閃めかすからいけない。茲に同じ事でもフクベと云ふとフクは福に通じ、何だか智仁勇とも折り合ひがよくなると言ふもの。斯く聖を讚嘆し來れば、吾人凡俗、大に此瓢箪聖者に學ぶ處のものがある様である。

聖なるかな吾が瓢箪！

初夏の山口

五月闇の空をスーイスーイと飛び交ふ螢の光も次第にうすれ行き
て、たま／＼道の邊のあやしき草の葉蔭に、喘ぎ／＼するを見出す頃、
もの憂き空は、煙るが如く咽ぶが如く日ねもす小雨そぼふる梅雨と
はなりぬ。

しど／＼と煙りてふるや梅雨の頃。

雨の日の後河原のながめこよなくよろし。

雨の日や柳の青く見ゆるかな。

雨に清められて、柳の芽のいと青く／＼つきりと見ゆる間を、燕の縫
ひ行く様、一幅の繪巻物とこそおぼゆれ。

さりながら、吾いほは、山のは近くありければ、連日の雨にて水か
さ増して、

山水の音にぞ夢を破りけり

天華のいほの今日が頃かな。

あわた／＼しき日の續きて、うらめしげに、うす墨色の空をながめつ
ゝ。

ひたぶるに、まちわびし日の長かりし

晴れ間なしやと仰ぎてしかな。

とて、かこちけり。

やがて、

大粒や一しきりなるはげの頃。

その勢のすさまじさ、あたるべくもあらず。されど、一しきりなる

はあまりにも足らぬ心地す。

二三三

朝のねやの何となう明るくおぼわて、とく起き出でて
起き出でて青葉の蔭に仰ぐなり

雲立ち登る雨後の山々。

げに、雨後の山々、峯々よりの雲のわき登る様、まして、長雨に閉
ち込められし後にながめしは一きは、さはやかなる心地こそすれ。

世は、いつしか夏の装となりぬ。

初蟬のなく頃ほひやむしかへる。

星夜

淡き光に萬物肅として聲なき月光の美觀や幽渺言ひ難し。さあれ、
澄み渡りたる大空に爛漫として咲き出でし悠久宇宙の花と飾られた
無數の星光を仰ぎ見る時の沈靜安慰幽邃深遠の神秘的光景には比す
べくもあらず。

夢皆深し萬象の

眼も夜も半ばにて

神秘の幕は垂れにけり

今は下界も聖からん。

東の空を昇り來る

星また星に聲もなし

西の空行き沈みゆく

星また星に思ひあり。

二三三

消ねては凝うる千萬の
 露のしづくに光あり
 凝りては消ゆる千萬の
 しづくの露に心あり。
 時に微風の一そよぎ
 知らず過ぎゆく誰が魂か
 時に流るゝ星いくつ
 知らず落ち来る何の魂。
 あゝ静かなる夜の色
 浮世の夢をさめいでて
 汝が永劫のふところに
 憂ひの子等を入らしめよ。

(晚翠)

遠くバビロニヤ、エジプトの夕べ、澄み渡りたる蒼茫たる天空への撞着より幾千年。今尙變りなきその神秘無限の扉をかたぐ秘めて、人の世の憂を外に、金砂銀砂の星づく夜の空こそ真に永遠の生命として四次元の世界と共に窮りなし。無音の静寂の裡に一種名狀すべからざる安静と慰藉を興へつゝ、悠久自然の神秘不可思議をまざまざと吾人の目前に展開して、沈思冥想の三昧は、やがて眞裡追求への想念を喚起し、以て無窮の蒼穹へ究理の小舟を掉さし出でしむ。

月なき御空に　　きらめく光
 あゝその星かげ　　希望の姿
 人智は果てなし　　無窮のおきに
 あゝ洋々たる　　銀河の流れ。

月無き御空に きらめく光

あゝその星かげ 希望の姿

人智は果てなし 無窮のおきに

いざ掉させよや 究理の舟に。

あ る 頃

秋立ちそめし其日より

學びの道を辿り來て

汝が寶庫を開くとき

汝がかひなはおのゝきぬ

その戦慄や學人の

獨り味ふものなれや

斯くて試しを終り來て

我家にいそぐ足もとは

雲間の夢のそれのごと

いでや今より秋の日を

思ふがまゝに浴びなんと

思ふあやにく空黒み

しぐるゝ日とはなりにけり

しぐれの雲は晴れやらで

尙此上に汝が身を

密雲遠く鎖すらん

しぐれとあらば一しきり

過ぎにし後は小春日の

春の車を思はしむ

その青雲に汝が身は

自由の空に巢立ちなん

しかはあれども汝が身は

憂の雲におほはれて

その双の手は力なく

わくら葉一枝手折るかな

(試験後病床にて大正十五年十月作)

別離の歌

逢ふことのあらば

別れのありと聞く

げに理りやまことなれ

しかはあれど淋しさを

なごかもすらん夕まぐれ

星もまたく頃なれや

あゝ別れなばいつのよに

又逢ふ事のあるやなし

語らふ事のあるやなし

さあれ行きませおゝしくも

希望の波のかなたへと

いざや送らん幸あれと

(昭和四年五月作)

湖畔雜詠

1180

旅路

旅にいね旅に起きつる我が夢は
幾夜も同じ故郷の空。

富士と秋草と湖を詠める

水近き千草の野邊に我立ちて

高くも仰ぐ富士が峰かな

山の涼しさと麓の暑さを詠める

いや深き秋々々を見るにつけ

ふもとの里の今日はいかにと

月夜虫聲

淋しさは月の淡きに啼く虫の

聲さへ遠き夜半の水の邊

をちこちの千草にすだく虫の音に

月の哀れのいやまさりけり。

虫の音しげくして

我れここにとばかりなるくつわむし

私も居てよとばかり鈴をふり

湖畔の散策

1181

いつになく疾く起き出でて水の邊を
そゞろあゆみしこともありしか

11811

湖上觀月

はからずも富士のね近くやどりして
うみの上なる月を見むとは

籠坂峠

越ね行きてかすみはるかに見かへれば
わが宿遠くなりけるかな

針樅林

人知らぬこの山里に神ながら

奇しくも生ふる針樅の森

山中の雨

さなぎだに淋しとぞ思ふ山中の
わびしくしぐる今日が頃かな

わびしさをなほ此上にませとかや
時雨の雲の晴れやらずして

山中の時雨にむせぶ水の面

心しづかにながめてしかな

11813

朝の富士

1166

ほのぼのとあかねさしそふ富士がねを

ここ山中に仰ぐうれしさ

里はまだ夜のとばりにねむれるを

はやくもはゆる富士が高みね

秋の富士

久方の光静けき秋の日に

きよくも澄める富士を見るかな

(昭和四年秋
山中湖畔にて詠める)

小説

ダイナモ―大明神

ヨークシャイヤからのエレクトリック、カーの原動力をなして居る三個のダイナモ―が、カンパーウエルで、ぶん／＼唸つてゐる。その技師長にヂエームス・ハルロイドといふ人が居た。彼は電気技師だつたが、ウイスキーのとても好きな、齒並の悪い、赤ら顔の野郎だつた。彼は常に神の存在を疑つたが、併し、カーノッツのサイクル (Carnot's cycle) の理論は認識して居るのだつた。そしてセークスピアも讀んだが、科學的の見地からは、零點だと思つた。彼の助手が、神秘的な東洋の一角から來た。名をアヅマジと云つたが、ハルロイドは、ブーバーと呼んでゐた。

ハルロイドは、ニグローの助手が大へん氣に入つてゐた。何故か
と云ふと、彼が、蹴つても少しも嫌な顔もしないので——そして、
その蹴るのが、彼の常習だつたが——そして又、彼を決して、ダイ
ナモーターに接近させず、その用法も教へやうとはしなかつた。

けれども、終に、ニグローの心が、此文明の最頂點たるダイナモ
ーターへ接觸しつゝある事をハルロイドも氣が付く様になつたのであつ
た。

アヅマジの定義といふものは、一寸人類學上は云ひ表し得ない程
のものだつた。彼は、髪の毛はひどく縮れ、色は、ブラウンと云ふ
よりブラツクで、目の白目が黄色を呈してゐた。その上、頭はねじ
けて、類のない奇妙な發音を以て、ぼつ／＼と話し出すのであつた。
ハルロイドは、彼の宗教的の信仰に就て——特にウイスキーをや

つた後に——彼の迷信を矯めやうとした。けれど、アヅマジは、そ
の爲めに蹴られても、ハルロイドが神を云々する事より逃れ出でん
とするのが、常であつた。アヅマジは、白くはあるが不十分な服を
着て、海峡植民地から、海を越えて、ロンドンのロードクライブの
機關室へとやつて來た。彼は、ロンドンの斯くも華やかなる事は夢
想だにもして居なかつた。彼が愈々上陸といふ日は、雨に煙る陰氣
な日だつた。身體は疲れるし、金は一文無しになるし、雨の中に困
りぬいて居る所を、ハルロイドに使用される様になつて、カンバー
ウエルで、毎日こき使はれる事になつたのである。

カンバーウエルには、三個のダイナモーターがあつた。その中の二つ
は始めからあつたもので、小型なものだつたが、新しい一つは、大
きなものだつた。小型な機械からは、やさしい調べ皮の音が、毎日

確實に流れ出でたが、大型の方は、そのコイルから連続的に迸り出づる爆音は、これ等の小さな音を打ち消してしまつて、鐵の地盤を盛んに揺り動かしめた。その騒音や、スチームの噴出の音は時に訪問者をよろつかせた位だつた。そして此雑音といふものは、機械家の見地からすると、明に缺點たるを免れぬのだが、アヅマジにとつては、尊敬すべき、偉大なものとしてしまつた。

その種々な音といふのは、スチームのどぎれ／＼の吼ゆる様な喘ぐ様な音、ビストンのシュツ／＼といふ出入の音、大きなドライビング、ホイールのだるさうな空気を打つ音、調べ皮の締つたり緩んりす時のバタ／＼いふ音などの雑然たる音響のために耳は一時は聾にされてしまふが、次第にその感覺を復して來るのであつた。その音は例へば、印度の大ラツバの様な音でも言つておかう。そして、

床は、しつかりして居るが、人々の足を震動させた。實に、その場所は、騒然たるもので、此上もなく不安定なところで、さうした状態は、人々に色々の考へを起させるに十分なのであつた。

三ヶ月間の機械家の大ストライキの間にもハルロイドだけは働いてゐた。それから黒んぼのアヅマジは、その混雑中には居たが、門と機械室との間にある木小舎の中で、食事などしてゐた。ハルロイドは、腹黒なやつで、さうした騒動の間にも、機械の理論的研究など發表した。

ハルロイドは、よく言つた。見ろ！千人もの人を安々と殺す！ちやうど神様の様に！”と、アヅマジは、きよろ／＼と見渡した。

また、ハルロイドは、大きなダイナモーターが大へん御自慢で、黒んぼの心をして知らず識らず、へんな思想へと向はしむるまでに、機

械の力や、大きさに關して誇張して、アヅマジに話して聞かせたのだつた。

彼は、人が殺される種々の方法を明示しながら、説明して行つた。そして其一つの方法は、アヅマジに異様なショックを與へた。その後といふものは、非常に激しい労働中のほんの少しばかりの休息中にもアヅマジは、坐り込んで、大きな機械を見詰めるのであつた。

時々、機械の或部分からは、スパークが迸つたが、概して、呼吸の様に、極く順調にリズムカルに動いてゐた。シャフトの回りをバンドが唸つてゐるし、ピストンの出入の心地よい音は、番人を非常に慰めるものであつた。それで、ハルロイドは黒んぼと一日中、此室にゐる事が、王座にでも居る様に思へ、彼が知つてゐる他のエンヂン・ルームの様に獄にでも閉ぢ込められてゐる様な感じは更になか

つた。それで彼等は愉快に働けた。そして、二つの小さなダイナモ―は黒んぼにとつては、實につまらぬものに見え大きな方は、ダイナモ―大明神と名付けて、尊敬してゐた。前者の氣短かで、不規則なのに反して、後者は、極く確實なものであつたから。

何と、巨大な事よ！ 何とスムーズに、安々とその仕事をしてゐる事よ！ その巨大にしてしかも靜なる事は、彼がラングーンで見た佛像の様だつた。しかしそれが活動力を有せぬものであるに反して、此方は、活動してゐる、生物である！ 大きな黒色のコイルは、ブン／＼やつてゐるし、ブラツシの回りにリングは回轉してゐるし、コイルの確實な重くるしい音は、唸つてゐる。アヅマジは實際不思議な程心を捕へられた。彼は、労働を好まなかつた。彼は、ハルロイドがウイスキーを買に行つて居る間は、坐り込んで機械を見守つ

てゐた。けれど、彼のほんどの居る場所は、ダイナモアの小屋の所ではなく、エンヂンの前の方だつた。それに、なほも彼が小屋の中に潜んで居ようものなら、ハルロイドは、コッパアのワイヤーで、滅茶苦茶になぐりつけた。彼は常に其巨像の近くに、坐を占めては、大きな頭上に廻つて来る調べ皮を見上げるのだつた。廻る時にバンドに繼があるもので、それが、週期的に廻つて来るのを面白がつて見て居た。それを見つめてゐると知らず識らず變な氣持ちになつてしまふのだつた。

科學者は、"野蠻は木や石に精神(活氣)を與へるものだ。そして機械は木や石より何百倍も活動してゐるものである"と教へる。そしてアヅマジは未だ野蠻だつた。

アヅマジの文明と云ふものは、彼の着物や、顔面より深くは染み

込んでゐない所謂上塗といふ恰好だつた。彼の祖先は、隕石や、印度の神様の車に血を流した血族の血などを崇拜してゐた野郎ばかりだつた。

ハルロイドが與へた機械への接觸の總べての機會を彼は看過しなうだ。彼は、日光にピカ／＼するまで其機械を磨いた。さしてさうする事が彼のサーピスの様に思へたので。

そして、彼の抽象的の神は次第に明瞭な具體的の神の存在へと移り行くのであつた。即ちダイナモアへの崇拜を次第に意識して來たのである。或日、彼は、振動してゐる機械室にやつて來て、ダイナモア大明神に對して、印度風の最敬禮をしたのであつた。それからハルロイドが行つてしまつた後、彼は、雷の様な音で唸つてゐる機械の所に行つて、彼が其忠實なるサーパントなる事をさゝやいた。

そして、彼に恵をたれ給ひ、ハルロイドの手から彼を救ひ出し給へとお祈りを一心にした。そうしてゐる時に、喧しい機械室の一角から一條の不思議な光輝が閃いて、ダイナモーター大明神の御神體に白色の妖光を發した。それを見たアヅマジは、彼のサーピスを此神様が嘉し給うたものと思つた。それから後といふものは、その以前には、實際彼のロンドンの生活といふものは淋しいものだつたが、今は、一寸も淋しさを感じない様になつた。そして、稀れに、彼の仕事が終わつてからも彼は室を去りかねてうろくしてゐる位だつた。

次にアヅマジは、ダイナモーター大明神に向つて「お、神様よ、總べてを神様は御存じです」と言ふのであつた。そうすると、機械の恐ろしい回轉の音は、彼に對する返事の様思へた。その後ハルロイドがはひつてさへ來れば、ダイナモーターの音の調子が、へんになる様に

さへ思へた。「何も神様の御命令だ。」とアヅマジは獨言した。

「馬鹿の非道は、熟す事はないんだ！」そして彼は、清算の日の早からん事を注意しながら待ちに待つた。

ハルロイドは以前に、彼の黒んぼを、彼が不在の時にも室の臨時の監督が出来る様に、機械に對する要素的概念を與へてゐたのだつたが、其後或日、アヅマジが、巨大な機械の近くをうろくしてゐるマナーに注意してゐたが、その舉動に少し疑念を持つ様になつた。

彼は、ぼんやりながら『悪い事』に携つてゐる事を直感し、コイルに或場所を腐蝕する處の油を注入してゐる所を捕へて、彼は、ピシント、とつちめられたのだつた。

彼は大聲で「もう大きなダイナモーターの近くに行くな！ブーバー！

そうしないど貴様の皮は剥ぎとられつちまふぞ！”アヅマジは、その後しばらくは、言ふ事を聞いたが、終に、彼は又々、大明神の前で最敬禮をしてゐるところを見つけられて、ハルロイドから彼の腕は縛り上げられて、出て行けと言はぬばかりに蹴り倒された。

アヅマジは、エンヂンの後につゝ立つて、憎々しげにハルロイドの後姿を睨むのであつた。

その時、機械の音は、新なりズムを流し始めて、その音響は、ちやうど彼のお國言葉の様に聞えた。

ダイナモ一のたゆまない、引切無しの雑音は、彼の淺薄な知識と、大きく強く根をはつた迷信とを掻き立て、終にその精神状態までおかしくしてしまつたのだつた。そして兎に角ハルロイドがダイナモ一大明神の生贄なげになるんだといふ考へが彼に浮んだとき、或る勝ち

誇つた感情の異様な衝動に依つて満された。

其夜——二つの黒い影が室の内に見られた。そしてその室は、ちら／＼と瞬く紫色の強いアーク燈で照らされた。そのために、二つの影は、ダイナモ一の後方に黒く／＼と書き出されたのだつた。エンヂンのボール、ガバナ一は、明るみから暗がりへと回轉した。そしてピストンはシュツ／＼と確實に動いてゐた。外の世界は、室の空間からは、信せられない程陰氣な、そして遠く／＼見わた。それは、機械の騒音が總べての外界の音といふ音を消し去つたので、そこには絶體の静けさがあるのみだつた。ずーんと遠くの灰色の家の黒い垣が數ヤード延んでおり、その上方の暗黒の空には、青白い小さな星が瞬てゐる。

アヅマジは、急に頭上に調べ皮が回轉してゐる室の中央を横切つ

て、ダイナモアの蔭の方へと走つた。ハルロイドは、カチ／＼といふ音と、發電子の廻る音を聞いた。「スイッチで何をしてゐるんだ？」彼は驚いて呼んだ。「以前から言つてゐるではないか……。」

それから暗の中のアヅマジのアジャ的の眼光には、決然たる色が見られた。

次の瞬間には、ダイナモアの前で激しく掴み合ふ二つの影が見られた。

「この野郎！」喉を絞めつけられたハルロイドが喘ぐ。

「野郎！その連結線をは、なせつたら!!」次の瞬間にハルロイドは足を滑らして、よろ／＼とダイナモアの方へ倒れかゝつた。掴んでゐた手は、本能的に緩んで、彼自身は、機械から逃れる事が出来た。急ぎの使者がステーションからダイナモア室の變事を見極めるた

め急派された。その使者は、門の前でアヅマジにばつたりと出合つた。アヅマジは、何事かを言うとしたが、その使には、黒人のブロークン、イングリツシユが少しも聞きとれなかつた。それで、急いで室へはひつて行つた。

室の中は、相變らず、機械はブン／＼云つてゐるし、これと言つて不整頓な所も見えななんだ。が然し、へんな髪でも焦るやうな匂が一面に漂つてゐた。それから彼は、大きなダイナモアに、くつ／＼いてゐる小さな奇妙な形の圓くなつた塊を發見した。そして近くによつて始めて其れが、ハルロイドの曲げられた死體であるといふ事を認められたのだつた。その人は、しばし驚愕のために身振ひしてゐた。それからやつとの事で、その顔を見たが、其の目は痙攣的に閉ぢてゐた。そして其處には元のハルロイドは見出し得ななんだ。彼は、大急

ぎで引き返して加勢を呼びに行つた。

一方アヅマジは、大きなダイナモーターに掴つて死んで行つたのを見た時に、その結果に就ては、豫想してゐたが、彼は不思議にも心がそのために浮き／＼して、大明神のそれが加護とさへ思へた。

機械の支配人が、現場に来て調査の結果は、自殺といふ結論を直ちにしてしまつた。そして、此人は、ほんの數語アヅマジに質問したゞけで、アヅマジはあまり問題にしてゐなかつた。

“おまへは彼が自殺する處を見たか？” アヅマジは、彼はダイナモーターからへんな音がするまで、機械の灼の見えない所にゐたと説明した。そしてその答は、何等疑を容れなかつた。

ダイナモーターからのけられたハルロイドの屍は、急いでテーブル・クロスに包まれて誰かの思ひつきで、近くの醫者へと運ばれた。

この有様を見た人々は働くのが嫌になつちまつた。そのために、七つ八つの汽車は線路の中央のむし／＼するトンネルの中で、立ち往生してしまつた。

その間、アヅマジは、どや／＼と押しかけた人々の間をよくのみ、込みもしないで、それに、ごんちんかんな返事をしてゐるのだつた、勿論山の様な人ばかりがした。——その人達といふものは、事件の真相は一寸も知らぬ人ばかりだつたが——それが、ロンドンの急死者のあつた場所を二三日間もうろ／＼してゐた。その中の一人の俄か雑誌記者は、アヅマジを捕へて、何か質問してゐたが、エキスパイヤールから追返されてしまつた。

今ははや、屍は運び去られ、世評もそれと共に消え失せた。アヅマジは、彼の火夫室で、じつと坐り込んでゐたが、何かの形が、何

度もくくのたくつては静まり行く幻影を見せつけられた。

殺人があつて一時間もたぬ頃、そこで驚くべき事件が起つたとは、つゆ知らぬものゝ様に、一人の人がはひつて来た。

彼が見た處では、その事件といふのも、實にちつぽけな、目立たない出来事に過ぎなかつた。——それは、唯ほんの電流の一時的の屈折に過ぎないのだつた。

今は、支配人の細つそりした姿が、エンジンと通路との間の振動してゐる床の真上の小さな通路を上つたり下つたりしてゐたハルロイドのが、つしりした姿に置き代へられてゐた。

“神様、何かおつとめを致しませうか？”とアヅマジは、ダイナモアの蔭の方から小さな聲で言つた。彼には、ハルロイドの死後しばし中止してゐた不思議な感情が回轉しつゝある機械を見上げた時

に再び燃わさかつた。

アヅマジは、人間が、斯くも早く、斯くも無造作に殺されたのを見た事はなかつた。——その巨大な機械は、その捕虜を一分時たりとも調子を變化さへせず、殺してしまつた。——それは真に神の業である。

何も知らぬマネジャーは、彼に脊を向けて紙片に何か書きつけてゐた。そしてその影が、巨大なる機械の下の方に投げられた。

“まだ、神様は、何か御入用なのだらう?!”

アヅマジは、忍び足で、前方へ進んだ！そして静かに止つた。

その時マネジャーは、急に書ものを止めて、室をダイナモアの最端の方へと歩いて行つて、ブラッシを検べて見た。

アヅマジは、躊躇したが、思ひ切つて、スイッチの側の暗の中へ

ど音なく滑り込んだ。そこで彼は待った。その時マネヂャーが、もどつて来る音を聞いた。彼は、彼から十尺もない所に、火夫が蹲つてゐようとはつゆ知らず前の場所に止つた。と途端に、ダイナモーターが急に唸り出して、次の瞬間に、アヅマジが彼の方へと暗の中を突進して行くのが見られた。——そして、最後に、マネヂャーは、身體を捉へられた。彼は、彼の足で蹴りながら彼の敵の頭を手の下へねぢ曲げて、彼の腰の捉りをやつと緩めた。そして機械から危く逃れる事が出来た。黒は又もや彼を捉へに來た。そして彼の胸に、ちゝれ毛の頭をあてたまゝ、二つの影は、永い間喘ぎ／＼してゐた。その中に、マネヂャーは、黒んぼの耳にいやと言ふ程噛みついた。黒んぼは、苦しきのために、泣き叫ぶのだつた。

缺等は床の上へどうとばかりにぶつ倒れた。——そして黒の耳から

は、たら／＼と血が流れ出てたが、彼の息の根をとめんものと腕いた。マネヂャーは最後に彼をやつと蹴り飛ばしてしまつた。その時に床の上に急いでこちらへ来る足音がした。次にアヅマジは、彼から離れて、ダイナモーターの方へと轉げ落ちて行つた。走り込んだ會社の事務員は、アヅマジの様を凝視しつゝ、つゝ立つてゐた。

恐るべき痙攣、その後にくつたりと機械にぶら下つてしまつた。そして彼の顔は、ねじ曲げられて。

“お蔭様で助かりました。”まだ床の上に坐つたまゝマネヂャーは言つた。

彼は未だ振動してゐる人物を見てゐた。

“明にいゝ死に様ではない。——しかしその何と速かなる事よ！”
事務員は未だ死體を凝視してゐた。萬事終つた！

マネジャーは無作法に立ち上りさま、彼のカラーのへんを直してから、頸を左右に二三回振り動かして見た。

「あゝ、可愛そうなハルロイドよ！今始めて讀めた。」と獨言した。それからほとんど機械的に蔭のスイッチの方へと行つた。そして車道へと電流を再び通じた。と同時に死體は、ぼたり……と地面へ落ちて來た。ダイナモーターは又元の元氣な活動を續ける様になつた。斯くて大明神の崇拜は、時ならずして終りをつげた。恐らく總べての宗教の最も短命なものとして。

けれどダイナモーターは、それ等の出來事は少しも知らぬものゝ様に今も毎日ブン／＼唸つてゐるのである。……終り

(The lord of the dynamos 42)

昭和四年八月箱根にて

彼

其午後の彼は不愉快でたまらなかつた。そして彼の頭は今日の學校でのKとの意見の相違からの激論の餘憤のいらだたしさで一ぱいだつた。

『あゝ不愉快だ！』と邊に人の居ないのを幸ひ、思ひ切りはき出しさま殆んど反射的に立ち上つて、其儘ふら／＼とまるで夢遊病者の様に彼の下宿の潜り戸をぬけて、宵闇せまる立小路を地上の一點を見つめた眼を容易に上げ様ともしないで、黙々として歩いてゐるのだつた。そして其無意識的な歩みの中にも絶えず彼の腦裡の混乱は續けられた。よほど歩いた頃。けた／＼ましい自動車のアラーム、フイッスルに不圖我に返つた彼は、始めて自分が今金龍館の側に立つ

て居る事を知った。

『そうだ！ 活動でも見てやれ！』と半ばすてばちに獨語すると何の躊躇もなく其のまゝ木戸口へ人波にもまれながら吸ひ込まれてしまつたと殆んど同時によほど興奮した面ざしの學生の一人も同じ入口から暗さの中へと消え失せたのだつた。

最初の映畫は何等興味のないニュースだつた、

次のは松竹の近頃でない力作『青春』だつたが混亂し切つた彼の頭を冷靜へと引き戻す程の力もなかつた。

『あゝ嫌になつちもうなー』と思はず舌打ちした彼は

『さあこゝらで歸らうかな』と半ば席から腰を浮した彼は、次の瞬間危く其處が活動館といふ觀念すら忘却して『あつ』と呼び出す處だつた。といふのは其次の映畫が彼が以前から見たい／＼の感が常

に念頭から去り得なかつた彼の獨逸ウィファ―社特作百年後の世界巨篇メトロポリス其のものではないか！

彼は今一心に展開し行く畫面を極度の緊張を以て凝視して居るのである。

見よ！ 其處に書き出された怪奇なる場面を！

空想の都會メトロポリス。

機械の都會メトロポリス。

未來の都會メトロポリス。

腦髓と手だけから出來た都會メトロポリス。

永遠に金を儲ける資本家と永遠に働く労働者とから成り立つてゐる都會メトロポリス。……………

今彼の目前には人力の否定か機械力の肯定か、あらゆる科學文化の沸騰點にあつて我々の『現在』より一百年後の『未來』にある人類の華なるエル、ドラドオ『メトロポリス』をまざく／＼と展開されてゐるのである。

ジョン。マスターマンは、卓越せる權威を以て此ユウトピアを把握する、儼然たる支配者であつた。マシニカルな彼の腦髓を迷る彼の意志は、總べての人間に對して機械的の敏捷さを強要した。彼は能率萬能主義を謳歌した。エフィシエンシー……エフィシエンシー……

メトロポリスの地下の最下層には、多くの職工達の居住する暗澹たる煉獄の如き地下街が横つてゐた。しかしその上層の地上街には、ブルジョアジーが歡樂の影を求めて彷徨する永遠の樂園があつた。そして此メトロポリスの支配者たる大資本家の權化ジョン・マスター

マンの一人息子エリックはやはり青春を愛し戀愛を知る一個の人間としての青年だつた。……………

彼は地下街の純情な女教師メリーを戀して、彼は地下街の生活に入つて愛するメリーをして能率萬能主義の父と地下街の勞働者等との間の調停者たらしめやうとした。この頃マスターマンは發明家ロトワングと共に研究に没頭してゐた人造人間の製作に殆んど成功してゐた。

そして彼はメリーを模形として遂に全く實在のメリーと酷似した人造人間を完成した。しかし、この科學的な不可思議な人造人間に對して、彼等は、清純なメリーの持つと同様な魂を注ぎ込むことは出来なかつた。唯それは人間の魂を忘れた一個の『惡魔』としてのメリーであつた。この恐ろしき惡魔の跳躍は遂に地下街の職工達を奮

激せしめて、遂に彼等はメトロポリスの機械部を破壊した。そしてそれが資本家に對する最後の手段だとした。けれども聽て彼等は、輕擧な彼等自身の盲動を反省して、恐ろしき魂を以つて跳梁する人造人間に對しての復讐に燃え、遂に之を焼き捨て、しまつた。そして、マスターマンも偏重な己の能率萬能主義の非を悟り、エリックと、メリーの愛の力強さに感激し、こゝに『人類愛』を仲介させる資本家對労働者の固い握手が交換され、彼等は更に愛を基調とせる世界再造に向つて努力し始めたのであつた。

満場の拍手を以て此不朽の名畫メトロポリスは終りをつげたのであつた。

そして其間、恐らく堂に滿てる觀客の誰よりも熱心に眞劍に死ん

ど全生命を打ち込んで見入つてゐたのは彼とKであつた事は勿論であつた。

電燈がバツとついて始めて夢からさめたものゝ様に深い溜息を吐いた彼は、さも永遠の謎でも解けたものゝ様にボンと膝を叩いて莞爾として座を立つて、きらめく星影を仰ぎつゝ、歸途についたのだつた。そして歸るさも幾度も『やはり人間味だ、人間愛だ！』とつぶやきつゝ、後から湧き出づる喜びをいかんともする事が出来なかつた。

そして『Kよ！ 僕等は此百年後の世界を現在そのものゝ形とは思はない。しかし現在の社會にも強さこそ異れ此未來の社會の教へる或ものが介在してゐる事は否定し得ない。僕は、君もさうだらうが、此映畫を唯單に一つのお話として看過する事はできない。

そこに横はる一片の眞理こそ現實にも將來にも適應される力強いものだと斷言する。

Kよ！ 愛の力程大なるものはないのだ！ そしてその愛の前には資本家も労働者も唯一個の眞の人間としての實在があるのみだ。故に愛の力を仲介として兩者の融合も結合も、そして社會の終局の平和も望み得られるものだ！ 愛なき社會は暗黒だ！ 唯そこには勞資の醜い葛藤を見るのみだ。恐るべきものは利己のための鬭争だ！ 人間の魂を忘れた唯物の社會だ！ さうだお互にこれから人間といふ意識をもつとく、強調しようではないか。そして吾人の目ざす眞の人類相愛を基調とせる永久の平和へ！！』と呼ばざるを得なかつた。

そしてKのいそぐと歩む黒い後姿が彼と反對の暗い路次に見ら

れたのも其の時だつた。………(終り)

赤 部 屋

「僕は、保證する。」僕は、君の言ふ其僕を驚かす眞物の幽靈とかをきつと、捕へて見せる。」と云ひ放つた。

そして、ストーブの前に、コップを片手に立ち上つた。

「御勝手に」と不自由な手をした老人が、僕を、じろり……と白い目で見ながら言つた。

「二十と八歳。」まだ憚りながら、幽靈など見た事は、ありませんからね。」

老婆は、ストーブの燭を見つめながら、大きな白い目を見はつた。「そうともく」と彼女は口を切つた。「二十と八歳の生涯には、

まだこんな家は見た事がなかつただらうよ。僕は、頷いて見せた。
 “男が、二十八やそこいらでは、またく見るものは、澤山あるで
 な”……彼女は、静かに、頭を左右に振つた。“澤山あるともさ……”
 ……と又繰り返す。僕は、半ば、老人どものあの單調な話聲が、
 此家の精神的の恐怖を誇大する様に思へた。

僕は、空になつたコップをテーブルの上に置いて、室内を見廻した。
 そして僕の短い、出来るだけ固く縮んだ姿が、室の隅の鏡に書き
 出されて居るのを、ちらりと見やりながら”よろしい””もしも今
 夜何かを見つけたら、僕は、大分偉いんだな”と公平な真面目な所で
 言つて見た。“御勝手に”と又老人が言つた。

その時僕は、通路のフラグの上に、杖のこつこいふ音と、重く
 しい登音とを聞いた。その次の瞬間に、ドアが開いて、前の老人

よりまだ腰のくの字になつた、皺だらけの第二の老人が、よちよちと
 とはひつて來た。

一本の杖を頼りにして、目には、目か、いをして、彼の襪めたビ
 ンク色の下唇は、彼の黄色の虫の喰つた齒の方へ、半ばはそり返り、
 半ばは、たれ下つてゐる。

彼は、テーブルと反対側の椅子の方へ真直に歩いて行つて、椅子
 に、ござりと身を投げかけて咳を烈しく始めた。

前の老人は、此新参ものを、嫌な目付きで迎へたが、老婆の方は
 そんな事には氣もとめぬらしく、やはり燗を見つめてゐるのだつた。
 “私しは言つとるぢやないか、御勝手にとね”と手の不自由な老
 人が、咳のやつと止んだ間に言つた。

“あゝ勝手さ”と僕は言つた。

目かくしの老人は、始めて、僕の存在に気が付いたらしく僕を見ようど、しばし、頭を傾げたり、後にやつたりしてゐた。

僕は、瞬間的に、彼の目を見た。小さな、光つた赤目だつた。それから又彼は咳を始めて、ぶつ／＼獨りで何やら呟いてゐた。

“何故お飲みでない?”とビールを押し付けながら、手の不自由な老人が言ふ。

目かくしの老人は、震ふ手で、コップにそれを注ぎ込んだが、半分は、テーブルの上に揺り溢してしまつた。

怪物の様な巨大な彼の蹲つた影が、壁に映つて、それが彼が、注いだり、飲んだりする度に、その通りの真似をしてゐた。そして僕は、こんな奇怪な番人どもを豫期してゐなかつた事を告白せねばならない。

そこには老衰と、恰もあの世のものゝ様で人間らしくないものが見られて、人間としての性質は、此老人達からは、日毎に少しづつ失せて行く様に見ゆる。それで、此三人の老人は、どうも僕にとつては心地よいものではなかつた。彼等のわびしき沈黙、彼等の曲つた舉動、彼等のにぶい話しぶりと云ふものは、全くどうも面白くないものだつた。

“若し、君達が、此幽霊の出る家を見せて下されば、僕は此所を住みよい家にしてあげますがね。”と僕が言つた。

咳入る老人は、不意に彼の頭を、僕が、びつくりする程がく／＼と後方につき出してから、目かくしの下から赤目でも一度僕を見て、何か言つたが、僕は返事もしなかつた。僕は、あたりを見渡してから、”もし。”と語勢を強めて言つた。”もし、僕に此幽霊部屋を見

せてさへくれ、ば、響應などしなくてもいゝよ。”

“強いて、君が今夜『赤部屋』に行きたければ——”(今夜ですよ！と老婆が云ふ。)

“君一人でかへ？” “そうともさ” と僕は、きんで見せた。

“そこで、一體どう行つたらいいのですか？” と問ふ。

“君は、少しの間、通路を行つて——” と彼が云ふ。

“ドアに行き當る所まで行きなさい。それから——螺旋状の欄干を傳つて行くと、その中途に出口がある、そして、一つのドアには、ラシャ布が下つてゐる。そこを通つて長い廊下を下つて行く。と左手にその『赤部屋』はある。”

“それでいゝのだね？” と僕が言つた。そして、その示された方向を繰り返して言つて見た。その中の僕の思ひ違ひの一ヶ所を訂正

してくれた。

“そして君は、ほんどに行くのかへ？” と目かくしをした老人が三度びその妙な不自然な顔つきで僕を見ながら言つた。(今夜ですよ！と老婆が云ふ。)

“そのためにやつて来たんだ。”と言ひながらドアの方へ行つた。僕がそうした時に、目かくしをした老人は、よろ／＼と立ち上つて、テーブルの方へ行つて、も一人の老人によりそつて、ストーブの方へ行つた。戸口の所で振り返つて皆の方を見たら、皆は、一塊になつて、煽を背景にして肩越しに一心に古びた顔つきで僕を見つめてゐた。

“お休みなさい。”と僕が、戸を閉めながら言つた。

“お勝手に。”と又例の老人が言ふ。

僕は、蠟燭の光をかき立て、冷かな反響のする通路を下つて行つた。實は、僕を、此不思議な三人の年金をもらつてゐる此家の監督者と、そこにある古風な重々しい家具が、氣を落ち付け様とする心の努力を無駄なものにしてしまつた事を自白せねばならぬ。

彼等は言は、前世記の遺物で、その時代は、現代とは精神的の方面は、よほどかけ離れてゐて、スイッチや、幽霊の實在を認識してゐた時代だつた。それに、そこらの家具が、如何にも幽霊の出るのに詭へ向きの古風なものばかりだし、そこに居る人といふのが、皆一様に今の世の中に住んで居るといふより、むしろ、あの世の人の様に思へた。しかし僕は、つとめて、そんな氣味の悪い考へを忘れやうとした。

長い、なまくさい、風の吹く通路は、冷くて、塵だらけで、僕の蠟

燭の火は、ちら／＼して、影までが、縮つて震へて見えた。僕の聲音は、高く低く曲りくねつた階段に響き渡つて、影は、僕の後から小走りについて来る。やつと一つの廣場に出て、立ち止つた。

そして僕が確かにした様に思つた、何ものかの聲音を耳を澄ませて聽いて見たが、そこには、絶対の静けさがあるのみだつた。僕は、ラシャの覆のあるドアを押し開いて、廊下につゝ立つた。

その結果といふものは、ほとんど僕が豫期してゐたものだつた。そこには、月光が階段の所の大きな窓からさし込んで、あたりの暗黒の中に生々と銀色に浮び出した色々のものは、ちやんとあるべき所にあり、此家を、十八ヶ月前に空屋になつたといふより、つい昨日なつた様にさへ思はせるのだつた。

蠟燭立てに、蠟燭が立つて、カーベットの^上や床の上には如何に

塵が積つてゐたにしても、月の光で平面的に照されてゐるので、そんなものは全く見ねなんだ。僕は少し行つてから止つた。

廣場の銅像の幾つかは、壁の角で見ねなかつたが、その非常に縮んだ影が、白い腰板の上に投げられて、それが恰も、僕を待ちぶせしてでもゐる様に思へた。そのため數秒間、僕は、冷水でも浴びた様に、固くなつて立ち止つた。短銃をポケットの中で握りしめて、つか／＼と進みよつた。がそこには只 Ganymede and Eagle の像が月光に照されてゐるのを発見しただけだつた。

これに勇氣を得て、僕の神経は、常態に恢復して來た。次の瞬間には又、テーブルの上の陶器の支那人が、僕が側を通る時に、が／＼と頭を動かしやがつて、僕を又ぞろ驚かした。

『赤部屋』の戸口の所に、蔭の多い一ヶ所があつた。僕は、蠟燭の

光で、角から角まで、念入りに見渡した。そして、ここだなと思つた。あの死人のあつた所はと。

そして、その話は、僕を急にぞつとさせて、恐怖状態にしてしまつて、僕は、肩越しに例の Ganymede を月光の下に見ながら、半ば、沈黙の入口の方へ向いて、むしろ急いで『赤部屋』の戸を開いた。

僕は、ドアを閉めるなり、鍵をしてしまつた。それから、蠟燭を高く差し上げて、若い伯爵の死んだ Lorraine 城の僕の徹夜すべき場所を見渡した。

そこは彼が死んだ場所といふより、彼の死の始つた場所で、彼は、その戸を開けて僕の上つて來た階下へ、まろび落ちて死んぢやつたのだが。

彼はその場所の傳説的の幽靈を征服せんとした勇しき企のための

徹夜の終る頃であつたのだ。

そしてそこには、もつと古い外の話があるのだ。といふのは、夫が驚かした爲めの憶病な妻の悲しい最後の話である。

それから僕は、蔭の多い窓のある大きな暗い部屋を見渡したが、その隅の方や、暗い床の様は、その暗の中に生じた恐しい傳説を諒解するに充分だつた。

僕の蠟燭の小さな焰の舌は、チヨロ／＼と焼ゆるばかりで、部屋の反對の端までは、貫き得るものではなかつた。そして只その光に照された部分のみ部屋の大海中の小島の様に浮び上つて見わたつた。

僕は、即座に組織的の検査をしやうと決心した。そして僕を掴へてゐる或恐怖的の推察を拂ひ清め様としたのだつた。

戸を閉めてから室内を歩き始めた。

具 家の一々を検べたり、ベッドの布をめぐり上げたり、バツとカーテンを開け放つて見たり、一心に探索して見た。

僕は、カーテンを開け放つて、シャツターのある窓を検べて見た。それから前に少し屈んで、黒い大きな煙突を見上げた。そして、秘密を探るために、總べての腰板を上から下まで叩いて見た。大きな鏡が二つ部屋にあつて、どちらにも揃の燭臺が立つてゐた。又、ストーブのマントル、セルフにも陶器の燭臺があつた。此等の總べてに僕は、蠟燭を立て、燈を点けた。火は、バツと燃焼上つた。それから、くるりつと回轉して室内を見渡した。それから、椅子や、テーブルの布を一々引ばつて見た。

僕のこうした緻密な試験は、全く成切だつたが、その時より遠く

の暗い怪しい場所を又発見した。そして、そこは、全くの静けさで、おかしな想像をかき立てるに充分だった。燭のバチ／＼いふ音の反響は、あまり氣持ちのよいものではなかった。

その片角の暗い蔭の中に何やら居るらしい氣配がした。——それがしかも生きたもの……静けさと寂莫との中をする／＼と當方に来る様子。思ひ切つて、正體を確めるために、蠟燭を持つて進んで行つた。けれど、そこには、何ものをも居なかつたので、やつと安堵の胸をなで下した。そこで、僕は、角の床の上に蠟燭を立て、元の位置へと戻つて來た。

此度は、いやに僕の神経は、極度の緊張を示して來たが、その有様を理由づける何ものもなかつたのだ。次第に僕の心は冷靜になつて來た。そして時間を経過させるために小唄などを唄つて、まぎ

らしてゐた。けれど、少し大聲を出すど、その反響は、あまり心地よいものではなかつた。その中に僕の心は、いつしか、階下の不思議な三人の老人へと走つてゐるのだった。

それから小半時もたつた頃か、蠟燭の光が少しく弱くなつて從つて、室内も暗くなつて來たので、僕をして活動させねばおかなかつた。

最初に、角の一つが、息をつき始めた。蔭を照してゐた燭は、次第にうすれ行きて、ちよろ／＼と心細くなつて來た。

その時前に通路で見た蠟燭の事を思ひ出した。そこで、月光を浴びながら戸を開け放つたまゝ蠟燭を十本だけ持つて引き返して來た。それを室内の玩具の陶器にさした。そして、それに火を點けると、僕の並べた合計十七の蠟燭の光で、部屋の隅々まで、明々と照らし

出された。

今まで暗かつた室内は、パツと白晝の様になつた。そこは、これらの小さな光の流れによつて、皆生々と快活なものとなつたのだつた。

けれども、まだ僕の徹夜といふ、くよくした考へは、重くるしく僕には感せられるのだつた。

真夜中頃とおぼしき頃、不圖角の蠟燭が消えた。そしてそこには暗い蔭が出来て来た。そして、僕は、蠟燭の消えたのは知らなかつたのだが、僕が、ふり返つて見た瞬間にそこには暗黒が横つてゐるのを見たのだ。

“強い風だ！”と僕は叫んで、テーブルからマッチを取り出して角のを點けやうと、室を横切つて歩いて行つた。

僕の最初のマッチは、點かなかつたが、二本目がやつと點いた。どその途端に、僕の後の壁のあたりで、何ものか、瞬をした様に感じた。僕は、無意識にふり返つた。そこには、ストーブの近くの小さなテーブルの上の蠟燭が二本とも消えてゐた。僕は即座に立ち上つた。

“不思議だ！”と僕は言つた。“ぼんやりしてたんだな？”

急いで行つて點けた。と又鏡のところの右の奴が喘いだ様に見せたが、スーッと消えてしまつた。それに續いて左のも消え失せた。燭は恰も指先で、蠟燭の心を摘み消した様に消えて行つたのだつた。無論煙も出なければ、光も發せず、唯暗黒を残したのみだつた。それを呆れて見てゐる中に、足もとの一つが消えた。暗黒は、僕の方へ一歩くと蹣跚寄つて来るのであつた。

“これは、たまらぬ。”と僕は言った。次に、マントル、セルフの一本が消えたと同時に、一方のも掻き消す様に消えてしまった。

“如何して、かう消えるんだらう？”と僕は、やゝかん高い聲で呼んだ。衣服を容れる場所のも、僕の今先き点けた一角のも消えてしまった。

“こりやー しつかりせんけりやー。”と僕が言った。

“蠟燭がいくらでも入る。”と半ばヒステリックに言った。そしてマンテルの蠟燭を点けるためにマッチをすつた。

僕の手は、二度まで、あのマッチの箱のあらい紙をすらすに外の部分で、しきりにすつてゐた位慌てゝゐたのだ。マンテルの所が、やつと明るくなつた頃には、遠い窓の端の二つのがファイと消えてしまった。しかし同じマッチで、鏡の所のをつけた。その一瞬時に、

入口の床の上の奴にも点けたので、どうやら暗をやつと驅逐し得た様な気がした。

やれ／＼と思つた頃、室の反対側の角の四つの蠟燭が一齐に消え失せた。それで、僕は慌てゝマッチをすつてそれから点けたものかと、うろ／＼した。

まご／＼してる間に、見えない手は、テーブルの上の二つを奪ひ去つた。

恐怖の叫びを上げながら角の方へ走つた。それから、彼方の隅へ、それから窓へと……やつと三本点けた。がストーブの上のは、もう消えてゐた。僕はそこで、いゝ考へが浮んだ。それは、マッチを書類入の箱の上に置いて、寢室の蠟燭立を掴へた。それにもかゝはらず、消火手続は、どし／＼進展して、迫り来る暗黒の魔の手と必死

的の闘争をした。そして火は數分間は、燃わてゐるが、すぐ消へ去つた。僕は自白するが、その時は、もう少々暗黒の恐怖のために、氣違の様になつて、僕から全く落ち付きといふものを失つてしまつた。そして喘ぎながら、蠟燭から蠟燭へと飛び廻つた。そして、無性に迫り来る暗黒魔の攻撃に對して無駄な努力を繰り返すのであつた。

僕は、不幸にして股をテーブルにひっかけた。僕は周章で、椅子を掴んだが、滑つて、轉ぶ時にテーブルから布を引つぱり落してしまつた。それで、僕の蠟燭は手から滑り落ちた。けれども轉げても僕はたゞでは起きなかつた。ちやんと立ち上るときには、他の蠟燭を手に握つてゐた。けれど、僕の滑つた時に火は消わてゐたものらしかつた。

けれども部屋の内には未だ光はあつた。それが僕から暗黒を追つてくれた。

“火だ！”僕は金の格子の間から僕の蠟燭を差込んで、火を點じた。

僕は、まだ燃焼^もてゐる炭の間に盛んにダンスをしてゐる燭を凝視した。それから家具を赤く反射的に照した格子の方へ二歩ばかり接近した。ところが知らぬ間に燭は小さくなつて終に消わてしまつた。と同時に反射してゐた赤い光も消へ失せた。僕は、急いで、格子の間から蠟燭を入れやうとした時、暗黒のどばりが僕を瞬く間に完全に包んでしまつた。——息のつまる様な抱擁だ！そして僕の頭腦から最後の理性をすつかり抜き去つてしまつた。蠟燭は、ポタリ……と手から力なく滑り落ちてしまつた。

僕は、僕に襲ひかゝるドエライ暗黒をつきのけ、様ど、無駄にも、自分の手を力一ぱい、暗の中につき出して見た。そして大聲をはり上げて、一生懸命に呼んだ。——一度——二度——三度。

そこで、僕は走り出さうと思つた。僕は、急に月光の廊下へ、頭を傾けて、顔を両手で蔽つて、戸の方へ一目散にかけ出した。

しかし、僕は、戸のある正確な方向を忘れてしまつてゐた。そこで、ベッドの角に、先づい、や、といふ程頭を打ちつけた。僕は、驚いて後戻りをしたが、かさばつたそこの家具に何度もく、衝き當つて、益々僕を狂氣の様にしてしまつた。

僕は、斯様な暗中の衝突のたびに悲鳴をあげるのみだつた。最後にとう／＼僕の額を非常に強烈にぶつけて、足場を保たうと努力したが、永い／＼恐るべき墜落を感じて、それから先の事は、少し

も解らなくなつてしまつた。

夜のしら／＼と明け渡る頃、やつと目がさめた。

僕の頭には、仰山な繃帯がしてあつた。そして例の手の不自由な老人が、心配さうに僕を凝視してゐた。

僕は我と我が身をきよろ／＼と見廻してから、何事だつたかを思ひ出さうと努力したが、なか／＼一寸思ひ出せさうにもなかつた。

僕は、角の方へ目を轉じた。そこには、老婆が、青い瓶から薬をコップに注いでゐた。

“こゝは一體どこですか”と僕は尋ねた。次に“君等は、知つてゐる様な顔ですか、一體ごなたでしたかね?”と言つた。

それから僕は、彼等の一部始終の話を、人事の様に昔話でも聞い

てゐる様なつもりで、漠然と聞いてゐた。

“夜明けに見つけたんですよ”と彼が言った。“こんどこそ君は、信じたでせう。”と老人が言ふ。“幽霊が出るといふ事をね？”彼は、失敗した友を如何にも氣の毒といった風に。

“はい。”と僕が答へた。“部屋には、幽霊が確かに出ます！”

“それを君は、見たと云ふんですね、私は、此年になつても未だ見ないんですが、尤も見やうともしませんので、やはり、さうすると死んだ伯爵の……。”

“否。”と僕は、言つた。“そうぢやーないんです。”

“それ私が、おまへさんに云つたでせう。”と老婆が、コップを手にして云つた。“それは、可愛さうな驚かされて死んだ伯爵夫人の……。”

“それでもない！”と僕はきつぱり言つた。

“伯爵の幽霊でもなければ、伯爵夫人の幽霊でもない。全然幽霊ぢやーないんだ！”しかし、“そこには悪いものが居る！”

“悪いもの？”と彼等が言つた。

“人にどりつくもの、中で一番悪いものだ！”と僕が言ひ放つた。“それは、純粹な即ち恐怖だ！”

恐怖は、光も、音もないが、如何なる理性もその前には何の役にも立たぬ。それは人間を、つんばにし、暗黒にし、壓伏してしまふ。それが、廊下から僕についたのだ。そして室の内で、それと死にも狂の戦をしたのだ。

僕は不圖話を止めた。そこには沈黙の瞬間が続いた。

彼等は“いかにも”と異口同音に言つた。

“暗黒の力、暗が、人を恐怖させた。”と言つた。
 そして、そこには絶えず潜んでゐる。君は日中でも、それを感ずる事は出来る。夏の日盛りでさへ。そしてそれは、塵の中を廊下づたひに這つて来る。——彼女の室には、此恐怖があるのだ。——黒い恐怖！そしてその家の罪の續く限り……。

(The red room より。昭和四年八月十三日)

英語童謠

Mary had a little lamb.

1. Mary had a little lamb,
 Little lamb, little lamb;
 Mary had a little lamb,

Its fleece was white as snow.

2. And ev'ry-where that Mary went,
 Mary went, Mary went;
 And ev'ry-where that Mary went,
 The lamb was sure to go.
3. If followed her to school one day,
 School one day, school one day;
 If followed her to school one day,
 Which as against the rule.
4. If made, the children laugh and play,
 Laugh and play, laugh and play;
 If made the children laugh and play,

To see the lamb at school.

5. And so the teacher turned him out,

Turned him out, turned him out;

And so the teacher turned him out,

But still he lingered near.

6. And waited patiently about,

Patently, patently;

And waited patiently about,

Till Mary did appear.

(自 譯)

マリーの小羊

1. マリーは、ちつちやい小羊かつた、

ちつちやい、ちつちやい小羊よ;

マリーは、ちつちやい小羊かつた、

雪みたいな白い毛をしてたよ。

2. そして、マリーの行く所ならどこへでも、

マリーが行つたよ、マリーが行つたよ;

そして、マリーの行く所ならどこへでも、

小羊は、きつとついて行つたよ。

3. 或日、學校につれて行つたら、

或日學校に、或日學校にだよ;

或日、學校につれて行つたら、

つれてつてはいけないのだけぞ。

4. 子供たちを笑はせたり、遊ばしたりしたつげ、

笑つたり、遊んだりね。笑つたり遊んだりね；
子供たちを笑はせたり、遊ばしたりしたよ、
學校で小羊なんか見たもんだからさ。

5. それで、先生が小羊を追ひはらつちやつたよ、
追ひはらつちやつたよ、追ひはらつちやつたよ；
それで、先生が小羊を追ひはらつちやつたよ、
けれどね、まだそこをうろろしてたよ。
6. それで、じつどがまんしてさ、まつてたよ、
がまんしてさ、がまんしてさ；
そして、じつどがまんしてさ、まつてたよ、
マリーが来るまでまつてたよ。

Mother, may I go out to swim?

Mother may I go out to swim?

Yes, my darling daughter,

Hang your clothes on hickory limb.

But don't go near the water.

母様およぎに行つてよいの

母様、およぎに行つてもよいの、

あゝ、いいともさ、私のいとし子よ、

着物をぬまぐるみの木の枝にかけてさ、

けれどね、水の近くに行つちやーだめよ、

Higurashi.

Niekaeru manatsu no taiyō mo itsushika yamanoha ni shizunde, yūkaze ga soyosoyo to fukihajimete hito-bito wa ikizumaru yōna hirū no atsusa kara ikigaetta koro, "kanakana - kanakana" to niwa no kirinoki no kozue ni kinzokuteki no koe wo kiku.

Boku wa kono kinzoku teki no nakikata ga nantonaku sukida. Ina, sono koe ga suki to yū yori, koe no suru koro no kimochi ga ii node koe madega suki ni nattanokamo shirenu.

Izurenishitemo, semi wa taitei ase daku-daku no hirunaka ni naku monoto sōba ga kimatte iru ga, kono semi wa sono na no gotoku higure ni "kanakana" to yaridasu node bokura ni ii inshō wo issō ataeru rashii.

Soreni Hakone datoka Unzen toka Kōya nado dewa asakara naiteiru ga kokora no suzushisa wa chōdo gekai no higure to onaji kuraidakara, kekkyoku "kanakana" to yū koe wa suzushisa to yū bansō ga iinode bokura ni ii kanji wo ataeru aisubeki koe no mochinushi da.

Kenbi-kyo ka no shō-sekai.

Sore wa makotoni bibi taru mono desu ga, wareware no iwayuru "Sekai" naru mono no shukuzu ni hokanaranai. Nantonareba, chisaku koso are, musū no dō-shokubutsu ga rittai teki ni seikatsu shite iru sama wa chōdo umi no soko nimmo riku no ue nimmo, yama no ue nimmo iroiro no shokubutsu ga hannoshi, dōbutsu ga katsudō shite iru noto nanra sōi wa nai.

Soshite, sokoniwa shokubutsu to mo dōbutsu tonno hannei shigatai iyō na

keitai no mono ga uō-saō shite, jitsuni nigiyakana "Sekai" wo tenkai shiteiru.

Soshite, kono shōsekai nimo mottomo genshi teki na tansaibō no monokara, yaya kōtō na seibutsu ni itaru made seisoku shite ite, sokoniwa hageshii seizon-kyōsō ga okonaware, shizen-tōda no hōsoku no tekiyō wo miidasu toki, sokoni seibutsu no yōran jidai wo mazamaza to nisetsukerareru to dōji ni, seibutsu shinka no dōtei wo ukagau koto ga dekiru. Kono genshō wa akiraka ni shinka no kyokugen turu jinrui kara tansaibō no mono ni itaru made seisoku shiteiru wareware no genni sei wo uketeiru fukuzatsu kashita "Sekai" no hyōgen taruto dōjini, sorewa koro "Sekai" no shoki wo monogatari mono de aru.

終りにのぞみて

何が何だか自分でも譯の解らぬことをごたく／＼並べて見た後で、それらが一つとしても、ものになつてゐない事をしみ／＼感じた。

そして自分といふもの、無能を單にそれははつきり意識させたままであつた事に氣が付いた。

思ひ切つて原稿の全部をすたく／＼にしようと思つた。

けれどそれらがよし何等の權威なき作品のみであつたにしても現在の自分ではこれ以上のものはいくら焦つて見た處で出来ない筈である。換言すれば現在の貧弱極まる自己の偽らざるそれが表現だと思へば我慢のできない事もない。

そしてその作品のほとんど全部が無職時代の謂はゞ思想のよ／＼な

い時代の所産ばかりで、それに自己の最も不得手な、しかし將來必ず必要な書く事への練習だと來てゐるから實際やり切れない。

僕等はいからだ！ 無爲徒食、机上の空論程恐るべき事はない。そして今將に何等かの形に於て、社會否人生への第一歩を踏み出さんとしてゐる自分である。ぐすくしてはおられぬ、原稿家みたいな事はして居られぬ。まだ書きたい事はたんとあるにはある。けれどまあこれ位で切り上げて、後は不言實行へと乗り出さう。

(昭和四年九月十一日 小雨をぼふる山中湖畔にて)

昭和四年十月十八日印刷
昭和四年十月二十五日發行

非賣品

山口縣豊浦郡長府町大字豊浦村貳千七百九拾叁番地

著者兼 發行者 貝島慶太郎

下關市東南部町字王司百四拾七番地

印刷人 藤田永之進

終

